

選択性緘黙の児童への関係性を重視した教育相談の取組[†] ～自閉症スペクトラムの教育的アプローチを取り入れた事例的検討～

高田屋陽子*

秋田県総合教育センター

武田 篤**

秋田大学教育文化学部

秋田県総合教育センターでは学齢期の児童生徒への教育相談を行っている。本研究では選択性緘黙と診断されたA児の事例を取り上げ、母親・学校・本人に自閉症スペクトラムの教育的アプローチを取り入れた教育相談を実施した。事例検討にあたって、母親の語るエピソードについて質的研究方法を用いながら分析し、子育てにおいてどのような思いをもち、それがお互いの関係性の中でどのように変化していったのかについて検討した。

その結果、エピソードを語ることで母親の本児に対する理解が深まり、関係性にも良好な変化が生じたことや、自閉症スペクトラムの教育的アプローチを取り入れたことで、本人にとって参加できる場面が増えることにつながったことがわかった。また、こうした周囲のかかわりが本人の自己理解を育て、不登校傾向の改善につながる事が明らかになった。

キーワード：選択性緘黙、エピソード分析、自閉症スペクトラム、自己理解

I はじめに

1 教育相談について

秋田県総合教育センター支援班では特別支援教育担当と生徒指導担当が教育相談業務を行っている。対象は学齢期の児童生徒を中心に、学校関係者、保護者からの相談が多数を占める。相談内容としては子どもの育ちや発達に関する相談、学習の遅れに関する相談、集団不適應や問題行動に関する相談、いじめや不登校に関する相談などである。平成19年に発達障害の児童生徒が特別支援教育の対象になってからは、小・中学校の通常学級に在籍する児童生徒の支援に関する相談が増加してきている。また、学

齢が上がるにつれて児童生徒の本来の障害の特性が見えにくくなり、不登校など二次的な障害が起こってから相談を開始するケースも少なくない。

2 選択性緘黙

今回報告するA児も「登校しぶり・不登校」を主訴に学校からの紹介により、保護者の来所相談が開始された。登校をしぼっている理由として本人が訴えたのは「友達がいないから学校へ行きたくない。」というものであった。

A児は保育園で集団生活を始めた頃より集団の中では一切話をせず、小学校に入学してからも学校では一言も発していない。幼児期に医療機関より選択性緘黙 (selective mutism, 以下SM) と診断を受けている。

SMは「他の状況では話すことができるにもかかわらず、特定の社会状況では、一貫して話すことができない」(American Psychiatric Association, 2003) と定義される。

2014年2月13日受理

[†]Relationship-Focused Educational Counseling for Child with Selective Mutism:

Case Study on Adoption of the Educational Approach for Autism Spectrum

*Yoko TAKADAYA, Akita Prefectural Education Center

**Atsushi TAKEDA, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

また、SMでは主に不安・緊張を背景としているものが多く、年齢が比較的低い場合には遊戯療法等が有効とされている。しかし、年齢が上がるにつれてこうした遊戯療法で行う遊びの中の関わりで発語を促すことは難しくなっていく、本人の自己理解を促していくことの重要性が指摘されている（角田，2008）。

3 問題と目的

選択性緘黙の原因として単一の原因として確定されたものはないが、遺伝的な傾向や子どもの身近な環境にある心理的要因および社会的要因が発症に関わっていると考えられている（大井ら，1979）。グレラム（Graham, 1987, 1999）は、「その子が家庭で情緒的な対人関係を持ち、学校でも身振りによって自分の要求を表現しているならば、自閉症の疑いは除外される」と述べている。しかし最近、松村（2013）は場面緘黙をアスペルガー障害との関連の中で再考すべき可能性を指摘している他、渡部ら（2009）もSMを主訴に受診した患者の中に、広汎性発達障害（pervasive developmental disorder, 以下PDD）あるいは自閉症スペクトラム（autistic spectrum）を疑うケースの存在を認め、自閉症スペクトラムの特性を捉えて支援にあたっていくことの有効性について報告している。

一般に自閉症スペクトラムの特性がある場合、保護者（特に母親）が子育てにおいて育てにくさを感じ、子育てに自信を失うことにより、子どもとの関係性に悪循環をきたしやすい。また、学校でもそうした本人の特徴を理解せず対応することで不適応を増大させてしまうことが懸念される。

今回、就学前にSMと診断されたが、その後の教育相談でいくつかの自閉症スペクトラムの特徴を示す児童の事例を経験したことから、母親・学校・本人に自閉症スペクトラムの教育的アプローチを取り入れて支援した教育相談について報告する。本事例の検討にあたっては、母親の語りについて質的研究方法を用いながら分析し、子育てにおいてどのような思いをもち、それがお互いの関係性の中でどのように変化していったのかに焦点をあてる。その中で、本人の自己理解を育みながら、周囲との関係性を総合的に捉え支援していくことの重要性を明らかにしていく。

II 対象と方法

1 対象事例の概要

対象事例はB小学校通常学級に在籍する4年生のA児とその母親、担任教師である。

対象のA児は集団生活の始まった保育園当初から集団では言葉を発せず、小学校の入学に際して当総合教育センターでの相談を勧められ来所相談を行った。就学前に医療機関よりSMと診断されたが、その後の教育相談における母親の話すエピソードの聞き取りや、本人の行動から、①社会性の質的障害、②コミュニケーションの質的障害、③行動のパターン化などいくつかの自閉症スペクトラムの特徴を示すことがわかった。またSENのチェックリスト^{注)}においても対人関係やこだわり等での困難度が高いことが示された。

コミュニケーションの実態としては、特定の場所（保育園・学校）では一切話をしないが、家族や親戚、A児の緘黙を知らない人との関わりでは普通に話すことができるという状態であった。また、周囲の人の表情や様子から状況を適切に読み取ることが難しく、必要以上に不安感や緊張感を感じてしまう様子がうかがわれた。小学校の通常学級に入学したA児は、小学校2年生の時に学校からの紹介で継続的な来所相談を開始した。この時の主訴としては、登校をしづりがちなこと、学校での集団生活の問題、母親の養育不安であった。特に登校に関しては毎朝、母親が自家用車で学校まで送り、特別支援教育支援員や担任の手助けを受けながらA児をなんとか車から降ろして教室へ行くように促すことが続いていた。

2 教育相談の実施方法

母親とは平成24年1月から平成26年2月まで、毎月1回、1回あたりおよそ60分、計17回（計17時間）の面談を行った。

面談では主に次のような内容について話し合った。①学校での様子②家庭での様子③友達との出来事④母親が印象に残ったA児のエピソード。

また、A児自身は教育センターへの来所を拒否していることから、本人の希望も取り入れ、次のような内容で月1回手紙（プリント）のやりとりを行った。①なぞなぞクイズ、②周囲との関係性に関すること、③自分自身に関すること、④家族との関わりについて。

担任に関しては、A児の特性についての説明や、指導方法や関わり方についてのアドバイスを適宜行った。

3 分析方法

エピソードを時系列毎に整理し、相互間のつながりを明確にする質的研究方法をとった。分析方法としては、資料1に示す通り母親から聞き取ったエピソードを、本人の発言や行動(A)を中心にし、母親が感じた思いや行動(a)を対応させた。また、それに対する総合教育センターのアドバイス(b)と、学校の対応(c)として表記した。学校とは必要に応じて連絡を取り合い、本人の様子を確認すると共に、支援の方向性について確認し合った。

III 結果

1 母親のA児への対応の変化

教育相談開始時の母親の相談内容は、A児の登校しぶりに関する対応の苦慮、家庭や親戚の中では普通に話をするのに、集団では一切話をしないことへのいらだちやそうした際のA児への対応や自分の育児についての悩みであった(a1)。この時点での総合教育センターの提案としては、①活動への見通しをもたせることによる本人の不安の軽減、②「話す」ことにこだわらない表現活動の重視、③段階的で体験的な活動による自信の積み重ねの3点である(b1)。この提案はA児の不安軽減を目指したものであるが、同時に自閉症スペクトラムの児童にも有効な手立てとも考えられる。

教育相談においては、実施方法に記したような内容を中心に母親の話をじっくり聞くよう心がけた。また、毎回、相談の最後には必ず「母親が心に残っているエピソード」を尋ねるようにした。これについては、最初、思い出すのに躊躇している様子も見られたが、回を重ねる毎に、自分から積極的に話すようになった。そして、このエピソードについて「本人はどのような思いでこうした行動をしたのだろうか」と、エピソードの背景について話し合いを重ねた。主なエピソードについて「母親の思い」、「総合教育センターのアドバイス」「学校の対応」との関係でまとめたものを資料1に示した。

その中で、いつもは自分から話し始めることが少ない母親が次のようなエピソードを話し始めた。

「いつもA児が視聴している民放のテレビ番組で次回『緘黙』について放映するという番組予告を見た。父親と相談して、A児がその番組を視聴する前に、両親で内容を確認し、A児にも見せてもよいのではないかと考え視聴させた。A児はじっとその番組を見ていて、特に感想は述べなかったが、それ以降、A児の行動に変化があったように感じている。」

番組の内容は外国の場面緘黙の女兒の話であり、学校で話さない女兒の家庭で絵本を読む様子をビデオ撮影し、学校で学級の友達にも見てもらうという内容であった。結果的にその女兒は学級でも話すようになった。この番組の視聴後に母親が感じたA児の行動の変化として、登校しぶりの軽減や学校での積極性があったという。その理由として「自分と同じ悩みをもつ人が世界中にはたくさんいると感じたのではないか。」ということ語ってくれた。

2 本人への取組

「友達がいないから学校へ行きたくない。」と話していたA児が、3年生の後期に入った頃から「どうしたら友達ができるかな。」と母親に尋ねる場面が増えてきた。こうした機会を捉えて、できればA児自身に来所してもらい関わるができることと考へたが、本人は当センターを「学校と関係のある場所」と捉えているようで来所には抵抗を示し、実現しなかった。そこで、本人の話す「友達がほしい」ということに関して、具体的にはどのようなイメージを期待しているのか、また、自分自身に対する自己イメージを探るために、母親と相談し、手紙(プリント)でやりとりすることとした。実施にあたっては、

- ① 母親がA児に手渡してやりとりしながら記入すること
 - ② 記入することでA児がその事柄について考えることを促す内容であること
 - ③ 記入方法はA児が記入しやすいうように○×式のものとする
- の3点を基本とした。

なお本人の希望を取り入れ、4回目からは「なぞなぞクイズ」も入れながらやりとりすることとした。母親によると、最初はすべての項目に×を記入し、母親の様子を見て書き直すという状態であった

のが、回を重ねる毎に少しずつ自分で考えながら記入していくようになった。実際に使用したプリントを図1に示す。

2019, 4月

いよいよ新学期がはじまりましたね(^^)
新しいクラスはどうか？今日もクイズをだします。答えてね！

クイズ1
○お父さんがきらいなものは何？
パパが

クイズ2
○とってとってもへらないものは何？
髪

よくあてはまる時は○ ときどきあてはまる時は△ ほとんどあてはまらない時は× をつけてくださいね。

(△) 新しいクラスはまだ少し緊張する
(△) 先生に聞きたいことがあるときや、伝えたいことがあるときはメモをわたすといい。
(△) クラスの友達の性格は一人一人ちがうと思う。
◎自分の性格であてはまると思うものに○をつけてみよう！
(△) はずかしがりや (△) やさしい気持ちがある
(△) 好きなことには夢中になりやすい
(△) きちんと正確にできないと落ち着かない
(△) 家ではおしゃべり

答えてくれてありがとう(^^)Y

2013, 10月

さわやかな季節になってきましたね
「食卓の秋」「運動の秋」「読書の秋」・・・竜野さんは「何の秋」を楽しんでいるのかな？
今日のクイズは少しむずかしいよ(^^)

クイズ1
○通るときには閉まって通らないときには開いているものは？
ふみすり

クイズ2
○新しい車は新型。では古い車は何が？

よくあてはまる時は○ ときどきあてはまる時は△ ほとんどあてはまらない時は× をつけてくださいね。

(○) 担任の先生はおもしろい先生だ
(○) 先生は自分の気持ちをなんとなくわかってきていると思う
(○) 世界中には自分と同じなみをもっている人がいると思う
(○) 自分の好きなことはけっこうがんばる方だと思う
(×) みんなが見ていると思うとからだ動きにくくなることもある
(△) お母さんがにこにこしていると自分もうれしくなる

答えてくれてありがとう(^^)Y

図1 本児とやりとりしたプリント

3 学校側の支援の変化

<小学校2年生>

相談当初、小学校2年生の時は、担任教諭からA児の登校しぶりが強まった時期の様子と学校での出来事について詳しく聞いた。学校行事参加への抵抗感が強いことや、集団活動において教室を飛び出すことがあるということがわかった。また、この時期「九九の暗唱検定」が開始されたことも一因として考えられた。「九九を暗唱できないと3年生になれないよ。」という担任の言葉を字義通りにA児は受け取り、その不安を母親に告げていた。学校側としては、できるだけA児に話をさせる機会をもたせたいと考えての対応であったが、逆効果を招いてしまった(c1)。

そこで以下の点について学校と確認した。

- ①いつもと違う日程や行事の際には前もって具体的に伝える。
- ②直接話すことよりも周囲の友達と自然に関われるような場の設定（「話さなくても関われる」状況づくり）を心がける。
- ③「話す」ことだけにとらわれるのではなく絵、作文、運動等も自己表現ととらえる。

<小学校3年生>

2年生の際の対応を踏まえて、本人が話さなくても相手とコミュニケーションがとれる状況づくりを行った。

- ①相手に動作（うなづき等）だけで伝わらない時のために、担任の机上には常にメモ用紙を準備する
- ②行事の前には事前に母親と連絡を取り合い登校が遅れた場合の連携の取り方について事前に確認する。

<小学校4年生>

3年生までに効果的であった上記①②の対応を継続し、年度当初に担任・保護者・教頭の間でA児の支援について共通理解をする場を設けた。

また、担任のC教諭に対してA児は信頼感をもつようになり、「先生が○○と言った。」という話を家庭で母親にもよくするようになった。またこの頃A児は学級のD児との交流を深め、一緒に下校する機会も多くなっていった。D児はC教諭に次のような相談をした場面があった(c6)。

D児 「Aさんと一緒にいると楽しい。でも私は

かり話しているけどいいのかな？」

C教諭「よく見てごらん。Aさんはあなたの話を聞いている時に身体のどこかが動いたり反応したりしているから。瞬きだったり、手だったり、首だったり。」

後日、D児がC教諭のところに来て

D児「先生の言うこと、本当だった。私が話していた時、ちゃんと手と目が動いていた！」

この話は母親からエピソードとして聞いたものだが、母親もとても嬉しそうであった。

また、この頃から一見すると、なぜこんな言動をとるのだろうとすぐにはわからない時でも母親は本人の行動を見守り、「どうしてこのような行動をするのだろう」という、背景について考えながらA児に関わろうとする様子が見られるようになっていった。

IV 考察

A児は小学校4年生の7月から自力登校を始め、現在(2月)まで継続している。学校では、言葉を発することはなく、これまで苦手としていた自分を表現する活動への取組や行事参加への抵抗感の減少などが見られるようになってきている。総合教育センターの関わりとしては、現在も母親が毎月1回のペースで来所相談に訪れること、本人とは手紙のやりとりを継続している。本事例のこれまでの支援の取組から以下の3点について考察したい。

1 母親とA児の関係性の変化

今回の教育相談を通して一番変化があったのは母親の来所時の表情である。これまで、A児への対応や、思うようにいかないもどかしさから自分の育児について悩むことが多くあったと思われ、表情も生彩を欠いていたが、徐々に明るいものとなっていった。これは自閉症スペクトラムの教育的アプローチを取り入れたことで、本人の支援にあたって「我が儘や努力不足」、「母親の養育問題」ということから離れて対応を考えることができたことと関係していると考えられる(a2)。また、A児にとっても母親が明るい表情で関わることで、よい影響を及ぼしたと予想できる。

また、毎回「今月のエピソード」という本人の言

動や行動の背景を考えることで、本人の気持ちの動きや、努力はしていてもなかなか本人自身がうまくできない葛藤などを意識化させることにつながり、そのことでA児が母親に友達との関わり方を相談した際に具体的なアドバイスを可能にしたと言える(a5)。

2 自閉症スペクトラムの教育的アプローチを生かした支援

学校での指導や対応にあたっては自閉症スペクトラムの教育的アプローチを参考にした支援や助言を行ってきた。「学校」という限定された場での緘黙であることや、知的には問題のない児童であったことから、相談開始当初の学校側のアプローチの視点としては「どうしたら話せるようになるか」ということにあてられた。しかし、そこに「見通しをもたせる」、「経験値を徐々に積み重ねていく」、「『話す』ことに限定せずにコミュニケーションの方法を具体的に伝える」、「メモを常備するなど環境を整える」等の自閉症スペクトラムの児童への支援方法を参考にし、それを取り入れたことでA児にとって参加しやすい状況を作り出すことに成功したと言える。

また、A児と担任教諭の信頼関係の深まり(A6)や他児へのアプローチ(c6)もA児が自分にとって少し困難なことにも挑戦してみようとする意欲に繋がったと思われる。

3 本人の自己理解の変化

A児のエピソードを見ていくと相談開始当初は「友達がいなくて学校へ行きたくない」→「どうしたら友達ができるのだろう」→「話せば友達ができる」→「でも話せない」…という葛藤が繰り返されてきたことが浮かび上がってくる(A1)。

しかし、一度「話さなくても友達是可以する」という視点に置き換えてから、自分と友達の関係性や、話すことはできなくても自分にはよいところがある(A3)という視点をもてるようになり、自己理解が少しずつ変化してきていた様子が伺える。

また、一つの大きな転機となったエピソードとして「こうした悩みをかかえているのは自分だけではない」、「お父さんと自分は似ているところがある。お父さんは今、普通に話している。」があげられる(b3, b4)。こうしたことが「自分も高校生になったら友達と話したい。」といった未来へのイメージ

くりに繋がっていると考えられる。

教育相談に関わっていて感じることは、「子どもは日々成長するエネルギーを秘めている存在である」ということである。自分の得意なこと、苦手なことを踏まえ、自分自身でどんな工夫をすることによって乗り越えることができるのか。こうしたことを考えていくためには、他者の肯定的な受け止めや、本人の気持ちに添ったやりとりが非常に重要である。それによって初めて本人の自己理解が進み、成長へと繋がっていくことを実感する。

謝辞

本研究に際し、快く調査協力をしていただいたAさん、母親には多くのご示唆をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

なお、本稿作成にあたり、Aさんと母親のご了解をいただきました。

注

SENのチェックリスト：文部科学省が2002年に実施した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」で用いた質問項目をもとにしたチェックリスト。

引用・参考文献

- American Psychiatric Association (2003) : DSM-IV-TR (高橋三郎, 染谷俊幸, 大野 裕訳) 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院.
- 笠原真理 (2006) : ことばに関する問題 場面緘黙・吃音. *こころの科学*, 130, 56-61.
- 河井芳文 (1994) : 場面緘黙児の心理と指導－担任と父母の協力のために－. 田研出版.
- 松村茂治 (2013) : 場面緘黙と発達障害, *日本LD学会会報*, 84, 1.
- 大井正己, 鈴木国夫, 玉木英雄, 森 正彦, 吉田耕治, 山本秀人, 味岡三幸, 川口まさ子 (1979) :

児童期の選択緘黙についての一考察. *精神神経学雑誌*, 81(6), 365-389.

Rosemary Sage, Alice Sluckin : 場面緘黙へのアプローチ－学校と家庭での取り組み－. 田研出版.

角田圭子 (2008) : 場面緘黙Q & A－幼稚園や学校でおしゃべりできない子どもたち. *かんもくネット*.

渡部泰弘, 榊田理恵 (2009) : 自閉症スペクトラムの観点から検討した選択性緘黙の4例. *児童青年精神医学とその近接領域*, 50(5), 491-503.

Summary

This research features the case of a child A diagnosed of selective mutism. Educational counseling adopting the educational approach for autism spectrum was given to the child, the mother and the school. Episodes recounted by the mother were analyzed with qualitative research methodology, conducting review into her thoughts regarding child-raising and changes in the relationship with the child. Ultimately, the mother gained greater understanding of the child in the course of reflecting into the episodes and led to improved change in the relationship. The adoption of the educational approach for autism spectrum had also increased the frequency of child's participation in the counseling sessions. The involvement of people surrounding the child led to growth of self-understanding for the child and to amelioration of the child's tendency towards school non-attendance.

Key Words : selective mutism, episodes, autism spectrum, self-understanding

(Received February 13, 2014)

本人のエピソード	母親の思い	教育センターのアドバイス	学校の対応
<p><小2>2月</p> <p>A 1 相談開始時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学校へ行きたくない。友達がいらないから」(a) ・「別の小学校へ行けばよかった。そうしたら、今頃普通に話しているのに。」 	<p>○自分の子育てについての思い (a1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「私の主人は子どもが苦手なのです。私も子どもにあまり優しくできない。家では普通に話すのに、学校ではどうして話さないのかわからない」 ・「子どもを叱ってしまって、眠った後に叱ったことを悔やむことがある」 	<p>○母親の気持ちの受け止め (b1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親の話や本人の様子を聞くことを中心に行う。 ・「母親の子育てが悪いのではない」ということを伝える。 <p>◇提案 1</p> <ol style="list-style-type: none"> ①『話す』ことのみでこだわらず、絵、作文、運動なども『表現』ととらえる。 ②周囲の友達が自然に関わる場の設定 ③父親や本人の来所相談も薦める（母親にとって父親や本人を伴うのは負担が大きかったようで、半年ほど来所できず）。 	<p>○不登校傾向を改善させたい (c1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「毎朝、出迎えて母親の車から降ろす手伝いをしている」 ・「話す機会を意図的に設定しようと思いました。「九九のかけ算ができないと3年生になれないよ」と話したのも励ましたつもりだった。」
<p><小3>10月</p> <p>A 2 相談の再度開始</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登校をしぶり、支援員と母親と一緒に車から降ろすことが続いている。 ・登校してからはみんなと一緒に活動に参加している。（学校からの飛び出しはなくなった。） 	<p>○自分の思いを聴いてほしい (a2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「本人や父親を説得して来所相談をするのは難しい。自分だけなら相談に来てみたい」 ・「話さないのは相変わらず。でも体育の時間にマット運動をみんなの前でできた」 ・本人の我が儘や努力不足ではない。 ・私のしつけや育て方の問題ではない。 	<p>○エピソードの聞き取り開始 (b2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親の話や聴くことを中心に、日常生活の中で本人について母親が印象に残るエピソードを尋ねることを始める。 <p>◇提案 2</p> <ol style="list-style-type: none"> ①エピソードの背景を考える。 ②本人とプリントを通してやりとりをする。 ③本人に「見通し」をもたせる配慮を行う。 	<p>○「話すこと」に固執しない支援 (c2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「行事の前やいつもと違う活動がある日に、登校をしぶることが多いようです」 ・教師の机にメモを用意し、本人がいつでも書き込める（伝えられる）ようにする。
<p><小3>12月</p> <p>A 3 心境の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登校時、母親の車からスムーズに降りることが増えてきた。 ・「話さなくていいこと一つだけある。友達が秘密を私にだけ教えてくれるから」 	<p>○本人の気持ちの変化を実感 (a3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エピソードについて語り始める。 <p>◇エピソード 1</p> <p>父「3年生だからそろそろ話したらどうだ」</p> <p>A「だって…話そうとすると言葉がつかまっちゃう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「父親と本人は似ているところがある。本人も父親の幼い頃の話や聴きたがることもある」 	<p>○本人と父親との関係性に注目 (b3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・父親も幼い頃あまり話さず、部活動を始めてから友達と話すことが増えたことに注目。学校・家庭では「話すことに固執しないこと」を継続し、父親からは時々本人の気持ちを確認するような言葉をかけてもらう。 	<p>○友達との自然なかかわりを増やす (c3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休み時間等に支援員が間に入りながら本人と周囲の児童とで追いかっけこ等で一緒に遊ぶ。
<p><小3>2月・3月</p> <p>A 4 本人の自己理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「緘黙」に関するテレビ番組を見る。 ・「どうしたら話せるようになるかなあ…」 	<p>○父親との協力 (a4)</p> <p>◇エピソード 2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつも見ている番組で「緘黙」について取り上げるという番組予告を見た。本人に見せるか悩み、父親と相談してDVDに録画し、内容を確かめてから本人に見せた。 ・本人は真剣に見ていて、その後本人の行動に少し変化が見られたように感じる。 	<p>○本人の自己理解を促す (b4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・父親と相談して番組を見せたのはよかった。同じような悩みを抱えている人がいる…という意識が生まれたのではないか。 ・本人自身の中で「話したい」という気持ちが高まってきているのではないか。 	<p>○活動に対する抵抗感の減少 (c4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・離任式で担任の先生へ花束を渡す係になった。本人の緊張を考え、事前に母親のみに話す。本人はなんとなく状況を考え自分が渡すのではと考えていたようだ。

<p><小4> 6月</p> <p>A 5 新しい担任・友達</p> <p>A「ママ、学校が嫌いだったのはどうして？」</p> <p>母「勉強が嫌いだったから、でも友達と一緒に何かするのは好きだったよ」</p> <p>A「私も話したらもっとおもしろくなるかもしれない」</p> <p>母「Aが話してもみんな驚いても最初だけだよ」</p> <p>A「みんな簡単に言うけど、なった人にしかわからないんだよ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自力登校を始める。 	<p>○本人の気持ちを考えたアドバイス (a5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本人の気持ちの変化に関するエピソードを多く記憶し話してくれた。本人の問いかけに関しても丁寧に対応しようとしている様子が見られるようになってきた。 <p>◇エピソード3</p> <p>母「DさんはAに話しかけてくるの？」</p> <p>A「いろいろ話しかけてくる。でも私は話さない。時々頷いたりする」</p> <p>母「今度『バイバイ』って手を振ってみたら？」</p> <p>A「バイバイしてみた。特にびっくりされなかったよ」</p>	<p>○本人の変化の確認 (b5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親と自分の行動を重ね合わせたり、『話さなくても友達ができるかもしれない。』という気持ちの変化が起こったり始めているようだ。友達とのかかわり方について具体的な行動をアドバイスできるとよい。 	<p>○配慮しながらも自然な対応 (c5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本人が言葉では応えないが、教師が話すことをよく聴いていることに気づく。 ・「尋ねる」ことを中心にするのではなく、「話しかける」ことを中心に対応する。 ・背後からAが間違っって「お父さん」と呼びかける出来事があった。
<p><小4> 8月～10月</p> <p>A 6 担任への信頼</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「先生が家でやってもラジオ体操をやったことになる…って話していたから」 	<p>○本人の行動を見守る (a6)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまで出たことのない夏休みのラジオ体操に出ようとしている本人の行動を見守る。当日は結局参加できなかったが、家で行ったことを認め褒める。 ・友達と帰ってきたAが「バイバイ」と手を振っている様子をそっと見守る。 <p>◇エピソード4</p> <ul style="list-style-type: none"> ・下校時、傘を壊してくることがあった。友達と遊んでいて壊れたらしい。実際に壊したのはBだったが、それをかばって「強風で壊れた」と告げた。 	<p>○「話さなくても友達ができる」という体験の積み重ね (b6)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「みんな仲良く」という指導はAにとっては疎外感をもつこともある。特定の児童と「話さなくてもいい関係をつくれる。」ということが大事。 ・周囲の児童へも「Aへのお手伝い」という形でなく、自然なかかわりが生まれるような支援をする。 ・担任への信頼感が高まり、苦手なことにも挑戦しようとする意欲がでてきている。 	<p>○他の児童への働きかけ(c6)</p> <p>D児「いつも自分だけ話しているけどいいのかな？」</p> <p>担任「大丈夫だよ。Aさんはしっかり聞いているから。それからAさんの様子をよく見てごらん。目とか顔とかか…どこか必ず反応しているから。」</p> <p>D児「先生、本当だった！Aさんの手が動いていたよ」</p>